

日本動物行動学会  
231103  
京都大学

ラウンドテーブル  
再訪：自然主義の誤謬

コメント  
植原亮（関西大学）

# 1. 自然主義者ヒュームの文脈 (チャーチランド『脳がつくる倫理』による)

- 道徳の根 → 私たちの生物的本性に属する
- 洗練された自然主義者は「である→すべし」的な幼稚でずさんな推論とは何の関わりもないことを明らかにする必要があった
- 聖職者たちが相手：  
記述から指令への浅はかな推論を行う傾向  
「夫は妻より強い、だから妻は夫に従うべし」
- ヒュームはまさに自然主義者であったがゆえに、そのような推論やその馬鹿さ加減から自分を切り離しておきたかった

## 2. 推論のあり方として①

- 演繹的推論なら「である→すべし」は誤謬
- しかし推論は演繹的推論だけではない
- 実践的問題の解決はだいたい制約充足問題  
どんな車を買うか、新しい仕事に移るかどうか…
- 最善ではないかもしれないが適切な解
- 「である→すべし」がダメでも現実には無問題
- もちろん制約充足も性急なのはよくない  
→「誤謬」と呼ぶのはその注意喚起？  
十分な事実を集めたうえで解を導くならOK

## 2. 推論のあり方として②

事実1：気候変動（温暖化）している

事実2：その原因は二酸化炭素だ



演繹的に導出

結論：二酸化炭素の排出を削減すべし

しかし、

結論（規範）は前提（事実1・2）と無関係か、

ということそんなことはない（次に続く）

### 3. 規範を自然主義がどう扱うか、 もしくは、規範と事実の関係①

- 規範命題は仮言命法の形をとる  
「もし～したいなら○○すべし／するのがよい」
- 規範的問いは次の形で問われる  
「もし～したいならば、何をすべきなのか？」  
「～を達成するには、どんな方法がよいのか？」
- 規範的問いに答えるには事実（記述）を見よ  
それは生物学的事実の場合もある  
（ヒューム的には人間本性）

### 3. 規範を自然主義がどう扱うか、 もしくは、規範と事実の関係②

- 現代の自然主義のボスであるクワイン  
認識論は心理学の一章になる  
批判：記述的認識論はそうだと、  
規範的認識論は？  
応答：工学の一種になる  
事実（の記述）は、問題の制約条件を与える
- 現代の自然主義者の信条：Ought implies can  
「すべし」は「できる」を含意する」  
何が「できる」かは事実的な問い

#### 4. 道徳哲学に関するスタンスの問題として① (主にデネット『ダーウィンの危険な思想』)

- アプリオリに（道徳）哲学がやりたい？  
事実と価値、記述と規範をそれぞれ別の領域に分けておくことで、完全に自律的な探究分野？
- 数学や物理学をモデルにしてきたのが間違い？
- 道徳哲学は、人間が現にどのようなものであり、またどんな存在でありうるかに関する事実に応じたもの、つまり人間本性についての一定の鋭い洞察や評価にもとづいたものでなければならない
- もしこれが自然主義というものなら、それを否定できる人などほとんどいない

#### 4. 道徳哲学に関するスタンスの問題として② (主にデネット『ダーウィンの危険な思想』)

- 短絡的な「である→べし」はもちろんアウト
- けれどもそれは、自然主義が誤っていることを意味しない
  - ヒューム的な洗練された自然主義者を想起せよ
- 見解が分かれるのはむしろ、どこを探せば人間本性についての最良の知見が得られるのか
  - 進化生物学、認知科学、文化人類学？
- そのとき議論の場はすでに自然主義の内部に移っている



## 5. 自然主義の分類

- 存在論的自然主義  
何が存在するのか？→科学が明らかにするもの
- 方法論的自然主義（×アプリアリズム）  
知識を得るための方法？→科学の方法  
実際には、科学と哲学の相互乗り入れが進行
- 人間本性自然主義（Human Naturalism）  
ヒューム、現代の自然主義的な道徳哲学など  
ただし、徳倫理（ハーストハウスなど）は、人間本性を基盤とする徳の涵養と発揮がよき生（開花繁栄）とするが、現代の自然主義とは相性が悪い